様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８７３

研究課題名（和文）先史時代における太平洋西部島嶼地域の貝類利用の復元研究

研究課題名（英文）Restration study on shellfish utilization in the western islands region of the Pacific in prehistoric

研究代表者
山野　ケン陽次郎（Yamano, Kenyojiro）

熊本大学・埋蔵文化財調査センター・助教

研究者番号：１０７１１９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、先史時代における太平洋西部島嶼地域の貝類利用の内容やその変化を明らかにし、各地域の独自性と共通性を明確にすることで「島嶼地域」における人類の移動や交流、先史文化の境界線を物質文化から新たな視点で捉えなおすことを目的とした。琉球列島では縄文時代後晩期の貝製装飾品を分析し、製作技術の導入と、沖縄諸島から奄美諸島への装飾文化の伝播を示唆した。６～９世紀頃の琉球列島で盛行した広田上層式貝符を分析し、型式変化を示し、出自と画期に言及した。琉球列島、フィリピン、マリアナ諸島の貝製品を集成した。その組成を比較し、共通性と相違性を明らかにすることで、今後の研究の基礎とした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is that to clear the uniquenss and commonality of each rejion of shellfish utilization in the Western Pacific island region,and to know how the human beings move and exchange the material.And to grasp the border in prehistoric by new perspective. On the Ryukyu chain islands, I analyzed shellfish ornaments in the late and final Jomon period, suggested the introduction of production technology and the propagation of the ornaments culture from the Okinawa Islands to the Amami Islands.
And I analyzed the Hirota upper-layer type shell tag which range in the Ryukyu islands around the 6 th - 9 th century, showed the change of patterns, and mentioned the origin and the epoch.I assembled the shell artifacts of the Ryukyu chain islands, the Philippines and the Mariana Islands. By comparing its composition, I clarified the commonality and the difference, and made it the foundation of future research.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　太平洋西部　先史時代　貝製品　貝類　琉球列島　マリアナ諸島　フィリピン

１．研究開始当初の背景

日本列島の南端に位置する琉球列島は南北約 1200 ㎞に連なる島嶼によって構成されている。先史時代の琉球列島は考古学的視点から北・中・南の 3 つの文化圏に分けて捉えられており、このうち北部圏から中部圏にあたる大隅諸島から沖縄諸島は、九州以北の縄文文化の影響を受けながら、独自の先史文化を発展させてきた（国分 1972）。一方で南部圏にあたる先島諸島は、グスク時代（AD1200 年頃以降）にいたるまで、沖縄諸島以北との文化的繋がりを見出すことができず、その文化系統を東南アジア島嶼地域である台湾やフィリピンに求める傾向が強い(安里 2010)。この文化起源論は琉球列島でも先島諸島でしか盛行しないシャコガイ科製貝斧が、フィリピンの先史時代遺跡で出土することに強く依拠している（図１）。しかし、両者には年代的な隔たりが存在する上に、地理的問題や他の物質文化との相違が認められる。また、房総半島から南に連なる伊豆・小笠原諸島と、その南に位置するマリアナ諸島とは、円筒石斧の存在から地域間交流が指摘されている（小田 1999）。加えてマリアナ諸島には、言語学的研究や土器の類似性から約 3500 年前にフィリピンからの人類の移動が推定されるなど（ベルウッド 1989）、太平洋西部地域では考古資料や言語学的視点から人類の移動・拡散が盛んに論じられてきたのである。しかし、いずれの論説もいまだ仮説の域を出ず、追検証が求められている。

こうした中、考古資料で注目されるのが貝製品である。上記した島嶼地域は豊かな貝文化を持つことで知られている。いずれの地域でも先史時代を通して貝類を食料資源としてだけでなく、実用品や装飾品などの貝製品に加工使用しており、生物学的に共通する大型巻貝・二枚貝が使用されることが多い。ただし、先行研究では、貝製品は各地域の関係性を明らかにするうえで重要なツールとして取り扱われながらも、肯定材料として著名な資料のみが引用されており、素材や形態、製作技術的観点からの総合的分析は認められない。代表者はこれまでの研究によって、琉球列島とマリアナ諸島の貝製品の研究を実施し、貝類利用の相違点と共通点を見出すことができた。貝製品が日本列島の枠組みのみにとらわれず、広くは環太平洋地域での先史時代の比較研究において非常に有効なマテリアルであることに着目した。本研究ではこれまでの研究成果を活かし、太平洋西部島嶼地域の貝文化を総合的に比較研究することで、各地域の先史文化の独自性をみいだすだけでなく、人類の移動や交流、先史文化の境界線を考察するための足掛かりとしたい。

２．研究の目的

本研究は、先史時代における太平洋西部島嶼地域の「貝類利用」の内容やその変化を明らかにし、比較検討をおこない、各地域の独自性と共通性を明確にすることで、「島嶼地域」における人類の移動や交流、先史文化の境界線を物質文化から新たな視点で捉えなおすことを目的とした。その準備段階として、琉球列島、フィリピン、マリアナ諸島などの太平洋西部島嶼地域で出土する貝製品の集成を網羅的に実施し、各遺物について考古学的手法を用いてデータ化、分析することを第一の目的とした。

３．研究の方法

本研究では琉球列島、マリアナ諸島、フィリピンの貝製品の集成作業、記録作業を通して、当該地域の比較研究まで言及する。研究において代表者は素材、製作技術、組成の３つの観点から貝製品研究を進めた。

１つ目は貝製品の素材の研究である。貝類には生息域や生息環境の限られる貝種が存在する。貝製品に使用される貝種の同定を徹底し、その貝種の生息分布や環境を調べることで、当時の貝殻の採集方法や交流、交易論に結び付けることができる。

２つ目は製作技術的検討である。琉球列島では貝製品を加工する上で、整形を行うための擦切技術や表面に文様を彫るための彫刻技術など、複数の製作技術が使用されていたことが分かる（山野 2010）。製作道具の推定や製作工程の復元を行うことにより、他地域との交流や技術伝播、ヒトの移動などを想定することが可能となる。

３つ目は遺物組成の研究である。各地域で出土する貝製品組成には類似点と相違点が存在する。例えば、先島諸島ではシャコガイ科製貝斧の出土が顕著だが、貝斧はマリアナ諸島やフィリピンだけでなくオセアニアに広く分布する。しかし、各地の貝斧の出現が限定された一地域からの伝播による結果とは考えにくい。貝殻は形態や強度によって利器や容器など機能に見合うものとそうでないものとがあり、例え文化的に断絶していたとしても複数の地域で類似した資料が発生する可能性は十分に考えられるのである。このような視点から、貝製品を単体で捉えるのでなく、遺物組成として複合的にとらえることで、各地域の独自性と、地域間の関係性について解明していく。

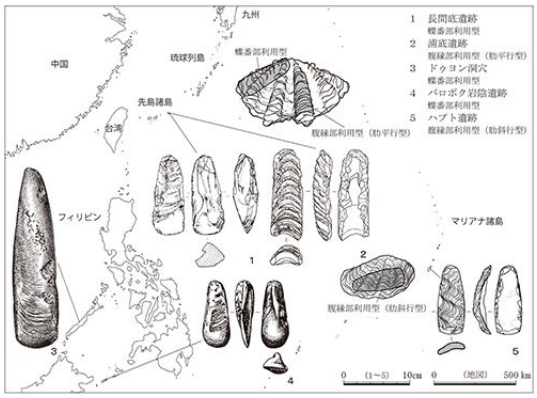

図１　シャコガイ科製貝斧の展開

また、遺跡における優良な資料を得ることができ、分析可能な場合は考古学的研究手法である型式学を用いて編年作業を試みる。形態や文様から遺物を分類した上で、層位や遺構の新旧関係から、遺物の新旧関係を明確にし、その型式変化を追い、編年図を作成する作業である。編年図を提示することで、その遺物の出自や変化の画期、終焉を明らかにすることができるだけでなく、年代の物差しとして用いることが可能となり、当該遺物出土地域の研究に大きく寄与することができる。

４．研究成果

（１）集成作業

2015～2017 年度にかけて、琉球列島、マリアナ諸島、フィリピンで出土する貝製品の集成作業を実施した。結果、現時点において琉球列島で 102 遺跡、マリアナ諸島で 45 遺跡、フィリピンで６遺跡の貝製品出土遺跡を集成することができた。

（２）資料調査とその成果

2015 年度から 2017 年度にかけて、琉球列島、マリアナ諸島で出土する貝製品の資料調査を実施した。資料調査は実測、写真撮影を基本とし、必要に応じて加工痕跡のデジタルマイクロスコープ撮影を実施している。

2015 年度には沖縄県伊江村のナガラ原東第３貝塚とカヤ原遺跡Ａ地点の貝製品の資料調査を実施した。また、同年度に鹿児島県伊仙町の面縄貝塚群の貝製品の資料調査を実施した。

2016 年度には沖縄県立博物館が保管している地荒原貝塚、大山貝塚の貝製品の資料調査を実施した。また、沖縄県石垣市の崎枝赤崎貝塚などの貝製品の資料調査を実施した。

2016年9月にはグアム島のガン海岸遺跡の貝製品の調査を実施した。

2017 年 10・12 月にはグアム島のナトン海岸遺跡の貝製品の調査を実施した。

2016・2017 年度にはグアム島のハプト遺跡の貝製品の調査を実施した。

（３）分析等

①琉球列島の貝製品

琉球列島に関しては、大きく２時期の貝製品についての各分析を実施した。

一つ目は縄文時代後晩期（BC2000～700 年頃）の貝製装飾品に関する研究である。当該時期の貝製装飾品を集成した上で、形態から再分類を試みた。貝製装飾品は貝製腕輪、貝製小玉、貝製管玉、貝製玉類、獣形貝製品、サメ歯状貝製品、獣牙状貝製品、庇状貝製品、鎌状貝製品の９種類に分けることができた。これらは前時期と比較して製品の種類や利用される貝種に多様性があり、その数も急増していることが確認できた。そして、これら貝製装飾品が奄美群島と沖縄諸島において類似性を保ちながらも、沖縄諸島から北方へ離れるにつれて装飾文化が薄れていくという点に着目し、沖縄諸島から奄美群島への装飾文化の波及を示唆した。また、当該時期の

図２　縄文時代後晩期の貝製品にみる擦切技法

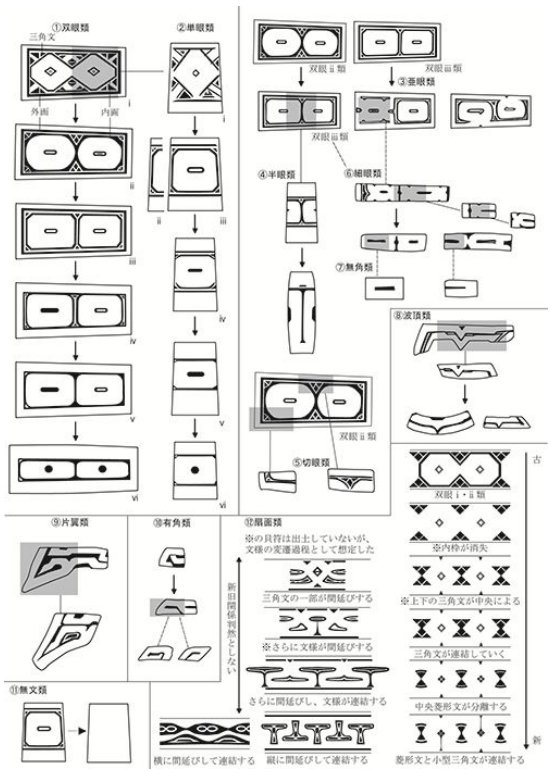

図３　広田上層式貝符の型式変化模式図

装飾文化の多様性が生まれる理由として、島周縁のサンゴ礁の形成や九州島以北の文化伝播、石器を使用した製作技術である擦切技術の出現をあげた（図２）。

二つ目に６世紀後半から９世紀に盛行する広田上層式貝符について分析を実施した。分析は貝符の出土点数が最も多い南種子町広田遺跡における埋葬遺構出土資料を対象にした。広田上層式貝符を再分類し、埋葬の新旧関係を根拠とした編年を作成した。結果として、広田上層式貝符の起源、各タイプの出自や系統についても、文様を模式図化し、変遷を示した（図３）。学史上著名で、貝符の起源が中国伝播であるという説の根拠の一つとなっていた「山」の字貝符についても、文様の一変化であることを証明した。

②マリアナ諸島の貝製品

ラッテ期（AD900～1700 年頃）のハプト遺跡の貝製品の分析を実施した。貝斧、釣針、刃器やビーズなど各種装飾品が出土している。貝製釣針は未製品も充実しており、これらがラッテストーン（掘立柱建物の石柱）の周囲２m×５mという狭い範囲で 90 点もの完成品、未成品、破片が出土していることから、住居の周辺で釣針製作を実施したことが想定された。未成品を整理し、釣針の製作工程や素材となる貝の使用部位の選定状況を復元している。

また、先ラッテ期（BC1500～AD900 年頃）のナトン海岸遺跡の貝製品を調査し、その組成を確認した。ナトン海岸遺跡からは貝斧、釣針、刃器、石灰入れ容器、錘、腕輪、ビーズや円盤状貝製品など各種装飾品が出土している。

③比較研究

琉球列島とフィリピン、マリアナ諸島の先史時代の貝製品組成を比較すると、様々な相違点と共通性を見出すことができた（表１）。

大きな相違点として、先行研究ですでに明らかなように、琉球列島中、沖縄諸島以北では太平洋地域で普遍的に出土するシャコガイ科製貝斧がほぼ出土しないことがあげられる。一方で、より台湾やフィリピンに近い琉球列島中の先島諸島の無土器期（BC700～AD1200 年頃）においてはシャコガイ科製貝斧が普遍的資料として確認できる。ただし、マリアナ諸島では先史時代を通してシャコガイ科の復縁部を利用した貝斧が使用されるのに対し、先島諸島ではそのほとんどが蝶番部利用型、あるいは螺肋部利用型である。また、素材から見ると、先島諸島では貝斧の材料としてシャコガイ科を使用するのに対して、マリアナ諸島ではシャコガイ科だけでなく、タケノコガイ科リュウキュウタケなどの大型巻貝を使用している。加工状況をみると、マリアナ諸島の先ラッテ期の貝斧は貝表面の成長線が消えるほど入念に研磨されているものが散見されるのに対し、ラッテ期の資料は研磨が粗い資料にほぼ限られる（図２－２・３）。こうした貝斧の加工状況の差は先島諸島でも近年指摘されており、時期差を表している可能性がある（山極 2017）。

また、琉球列島では貝製釣針の出土例は数例しかなく、フィリピンでも皆無だが、マリアナ諸島では先史時代を通してシュモクアオリガイ製の単式釣針が出土しており、ラッテ期にはその数は爆発的に増えるものと考えられる。両者は形態的にも差違が確認できており、今後、詳細な分析が必要である。

表１　各地域における貝製品の組成

			装飾品				実用品					定形貝製装飾品
					貝製小玉（ビーズ）		貝斧					
			イモガイ科製腕輪	イモガイ科製円盤状貝製品（シェルディスク）	イモガイ科	ウミギクガイ類	シャコガイ科腹縁利用	シャコガイ科蝶番利用	タケノコガイ・フデガイ科	貝製釣針	スイジガイ製利器	
琉球列島	奄美群島沖縄諸島	貝塚時代前期 BC4000～BC700年頃	△	△	○	×	×	×	×	△	○	○
		貝塚時代後期 BC700～AD1200年頃	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○
	先島諸島	有土器期 BC2300～1500年頃	×	×	○	×	×	×	×	×	○	?
		無土器期 BC700～AD1200年頃	×	○	○	×	×	○	×	×	○	?
フィリピン		新石器時代 BC4000～AD0年頃	○	○	○	×	?	○	×	×	?	?
マリアナ諸島		先ラッテ期 BC1500～AD900年頃	○	○	○	○	○	?	?	○	?	?
		ラッテ期 AD900～1700年頃	×	×	△	○	○	×	○	○	○	○

○は一般的に存在するもの、△は数は少ないが存在すりもの、×は存在しないもの、？は不明。

図４　グアム島ナトン海岸遺跡出土貝製品

一方、共通点として３地域全てでイモガイ科製腕輪と円盤状貝製品、貝製小玉（ビーズ）が出土することがあげられる（図４－１）。イモガイ科の白色巻貝が貝製装飾品の素材として広範囲での汎用性を持っていたことが分かるが、先島諸島では貝製腕輪の出土例がないことは注目される。また、マリアナ諸島ではラッテ期になると両者が無くなり、ウミギクガイ科製小玉が主流になるという傾向があり、年代的な組成の差も読み取ることができる。

今後、資料の精査が必要ではあるが、現時点で比較分析したところ、①貝製品の組成からみると沖縄諸島、フィリピン、マリアナ諸島は文化圏、あるいは年代が異なるにもかかわらず、共通する貝製品を複数有している。②これら共通する貝製品は、形態や使用部位、加工状況、素材となる貝種からみると内容が異なることがある。③琉球列島とマリアナ諸島については貝製品の内容に時期差が顕著であるということが判明した。

各島嶼は亜熱帯あるいは熱帯の気候に属する貝種を素材として使用していることから、当初の想定通り、共通する貝製品組成を認めることができた。しかし、その詳細をみると、形態や製作技術、素材の点から異なる点が見受けられる。この共通性と相違点を明確にした上で各種貝製品を再分類し、年代を精査することにより、貝製品からみた文化の境界線と繋がり、出自や貝文化の伝播を解明していくことができると思われる。

（４）まとめ

本研究においては、琉球列島およびマリアナ諸島を中心とした貝製品の集成作業を第一とし、必要なものについて資料調査を実施するなどし、これらを素材・製作技術・組成・形態の視点から分析した。

このうち琉球列島においては、縄文時代後

晩期の貝製装飾品を形態から分類し、製作技術について精査した。これにより九州島以北からの擦切技法の導入を指摘し、当該時期における沖縄諸島から奄美諸島への装飾品文化の展開を示唆することができた。また、紀元後６世紀後半～９世紀頃に琉球列島で盛行する広田上層式貝符について文様や形態から分類し、型式学を用いて先行研究とは異なる編年案を提示した。これにより、広田上層式貝符の出自と展開、終焉について再評価をおこない、当該時期の年代の物差しとした。これら成果について論文掲載あるいは口頭発表により公表している。

マリアナ諸島においては、貝製品を集成の上、先ラッテ期とラッテ期の貝製品の資料調査を実施することで、当該時期の貝製品の概要を把握することできた。また、琉球列島、フィリピン、マリアナ諸島における先史時代の貝製品の組成の共通性と相違性を見出し、素材や形態上の変化を確認することができ、今後の貝製品研究の基礎とした。これらの成果については分析を継続しながら、今後公表予定である。

今後は、資料が不足しているフィリピンの貝製品の再集成や、隣接する台湾島の状況の確認が必要である。また、当初の想定以上に資料数が豊富であったマリアナ諸島における先ラッテ期とラッテ期の貝製品の資料調査を実施し、当該時期の貝製品の変遷図を作成することも目標とする。

〈引用文献〉

安里嗣淳 2010「南琉球の先史文化と東南アジア」『南海を巡る考古学』　pp.159-182　同成社

小田静夫 1999『南島文化叢書 21　黒潮圏の考古学』　第一書房

国分直一　1972『考古民俗叢書 10　南島先史時代の研究』　慶友社

ピーター・ベルウッド（著）、植木武・服部研二（訳）1989『太平洋　東南アジアとオセアニアの人類史』　法政大学出版

山極海嗣　2017「南琉球地域から見た東南アジア「貝斧利用文化」の北上の可能性」『東南アジア考古学』第 37 号　pp.19-34　東南アジア考古学会

山野ケン陽次郎　2010「琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究』８　pp.317-332　熊本大学大学院社会文化科学研究科

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

①山野ケン陽次郎　2015「古墳時代における琉球列島との貝交易」『第 30 回国民文化祭かごしま 2015』　pp.40-45　第 30 回国民文化祭大崎町実行委員会

②山野ケン陽次郎　2016「兼久式土器に共伴する貝製品の年代と変遷」『第８回奄美考古学会発表資料』　奄美考古学会

③山野ケン陽次郎　2016「琉球列島における縄文時代後晩期の貝製品と製作技術」『第７回　沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表会資料集　南西諸島の縄文時代後晩期の南北交流』　pp.35-44　沖縄考古学会・鹿児島県考古学会

④山野ケン陽次郎　2017「琉球列島における縄文時代後晩期の貝製品と製作技術」『鹿児島考古』第 47 号　pp.26-34　鹿児島県考古学会

以下は投稿中

⑤山野ケン陽次郎　「先史琉球列島における広田上層タイプ貝符の研究」『中山清美氏追憶論文集』　奄美考古学会

〔学会発表〕（計　2 件）

①山野ケン陽次郎　第８回奄美考古学会口頭発表「兼久式土器に共伴する貝製品の年代と変遷」2016 年８月 27 日　奄美市立奄美博物館

②山野ケン陽次郎　第７回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会　口頭発表「琉球列島における縄文時代後晩期の貝製品と製作技術」　2016 年 11 月 26 日　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者

山野ケン陽次郎（KENYOJIRO　YAMANO）

熊本大学・埋蔵文化財調査センター・助教

研究者番号：10711997

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

Richard.K.Olmo

片岡修（OSAMU　KATAOKA）